

○原貴洋・松井勝弘¹⁾・鈴木達郎
(農研機構九州沖縄農研・¹⁾農研機構作物研)

【目的】

ソバは、生育期間が短いことから輪作に組み入れやすく、また、単位土地面積当たり労働時間が短いことから遊休地の活用で有用であり、さらに、6次産業化による地域活性化に活用されている。

九州では伝統的に、夏季に早期水稻等を収穫した後にソバを播種する夏まき栽培が広く行われているものの、品種は在来種等が主となっており、品種の選択肢の拡大が望まれる。

九州の夏まき栽培に適する品種は、九州の春まきより短日となる南西諸島の春まき栽培環境にも適する可能性がある。南西諸島や九州を含め、春まき栽培では穂発芽が問題となりやすいことから、難穂発芽性が望まれる。

こうした背景の下、九州の夏まき栽培に向き、難穂発芽性に最も優れるソバ系統「九州8号」を開発したため、その特性を報告する。

【材料および方法】

2007年に「常陸秋そば」と「春のいぶき」を交配し、2014年まで集団選抜を繰り返した。難穂発芽性については、F4～F7の各世代で、成熟期に花房を採取し、10日間25℃暗黒下に置き、毎日散水し発芽個体を除去し、無発芽個体を選抜した。

2017～2019年8月23日に、農研機構九州沖縄農業研究センター内の圃場(熊本県合志市)で播種し栽培し、収量、成熟期および穂発芽を調べた。

穂発芽は、最も晩生の鹿屋在来の成熟期であった2018年11月20日に子実を採取し、暗黒下30℃10日間での発芽試験による簡易検定で調べた。

【結果および考察】

「九州8号」の収量は、他の品種より高かった(第1表)。「常陸秋そば」に比べ、成熟期が晩く(第1表)生育期間を長く確保できたため、多収となった可能性がある。一方、成熟が晩い「鹿屋在来」は(第1表)、成熟直前の低温環境が減収要因となった可能性が考えられる。「鹿屋在来」が栽培される南九州は、今回の試験地である熊本県合志市より温暖であるため、「鹿屋在来」が多収となりやすい。そのため、南九州での栽培により「九州8号」と「鹿屋在来」の収量を比較することが望まれる。

南九州では「鹿屋在来」や「常陸秋そば」より生育期間が短い「さちいずみ」が徐々に普及しており、晩秋の早霜害を受けにくい利点がある。「九州8号」は、現在「鹿屋在来」等を栽培しているが早霜害リスクを低下させたい産地への導入を期待したい。

「九州8号」の穂発芽は、既存品種の中で最も穂発芽しにくい「鹿屋在来」より、さらに少なかったことから(第2表)、穂発芽が問題となりやすい地域での活用が期待される。南西諸島の春まき栽培では、九州の春まきより短日となることから、九州の夏まき栽培向けに育成されたソバ品種「さちいずみ」の収量性が優れ、普及が徐々に進んでいる。「さちいずみ」の成熟期は「九州8号」の2つの親の間であり、「春のいぶき」より晩く、「常陸秋そば」より早い。しかしながら、「九州8号」の成熟期は常陸秋そばよりさらに晩かった(第1表)。成熟の早晩は春まき栽培での収量に大きく影響するため、南西諸島での春まき栽培により「九州8号」と「さちいずみ」の収量を比較することが望まれる。

今後、九州の夏まき栽培向け新品種や、南西諸島向け新品種、の導入に関心がある方のご協力を頂きながら、系統適応性試験や現地試験を実施したい。

第1表 ソバ「九州8号」の熊本県合志市における収量性。

	収量 (kg/10a)				成熟期 (月/日)			
	2019	2018	2017	平均	2019	2018	2017	平均
九州8号	159	193	220	191	10/30	11/09	11/01	11/03
常陸秋そば	152	143	201	165	10/26	11/04	10/26	10/30
鹿屋在来	158	142	182	161	11/13	11/20	11/13	11/16
栽培年	2019	2018	2017	平均	2019	2018	2017	平均

注) 播種は8月23日。

第2表 ソバ「九州8号」の穂発芽。

	穂発芽 (%)	審査基準における標準品種の穂発芽
九州8号	25	
常陸秋そば	97	7難
鹿屋在来	40	8かなり難(最高値)